

## 度会春彦本縁

——度会氏の祖先祭祀——

小林 幸夫

### (一) 白大夫・度会春彦

京都・北野天満宮は、撰社「白大夫社」に伊勢神宮の神主度会春彦を祀っている。『山州名跡志』(卷之八)は「第一ノ撰社」としてつぎのように記している。

在中門ノ内西向ニ所祭ル 勢州ノ神主春彦ガ靈神ナリ 禰宜補任ニ云ク。渡遇ノ春彦ハ。天御中主三十六世ノ孫也。即チ神主ノ二門大内人高主六男也。延喜十八年戌ノ六月廿日ニ任ス。同廿年十二月廿五日叙スニ外從五位ノ下。承平三年十一月廿日。辞シ職ヲ。譲リニ男晨晴ニ。天慶七年正月九日卒ス。蓋シ菅ノ三品在世之時有リニ幽契ノ睦故ニ為第一ノ撰社ト也。

白大夫伝説については、別の機会に論じたことがあるので、繰りかえすことはしないが、菅原道真と親交があったというのは事実ではない。「白大夫春彦」は伝承上の人物にすぎないのである。むしろ注目したいのは、「禰宜補任」を引用して述べられる、度会氏二門・大内人高主の六男、以下の記事である。伝承にしかすぎない白大夫春彦と、高主の六男以下の記事が、どう結びつくのか。白大夫度会春彦の伝説を調べていくと、そのことがすっきりと飲み込めない。むしろ伊勢の白大夫・度会春彦の伝説は、「高主の六男」という春彦の事跡を明ら

度会春彦本縁

かにすることで、その全体像が見えてくるのではないか。そう考えてこの論考を用意してみたのである。

### (二) 度会氏の一女六男

度会氏には二門と四門があり、春彦は二門に属する。度会氏の中祖乙乃古命には四男あり、一は爾波、二は飛鳥、三は水通、四は小事、という。そのうち一と三の家系は絶えて、飛鳥と小事の末裔のみがつづいた。したがって度会姓でも、飛鳥の末裔を二門、小事の方を四門と称した。松木、檜垣、宮後、久志本などは二門、出口、藤波、廣田などは四門である。春彦は、二門飛鳥の末孫であり、春彦の後裔は松木氏を継いだという。

神宮神官蘭田守良は『神宮典略』のうちに「度会系論」を著して、諸書を引きながら「春彦」の履歴を記し、検討を加えている。少し長いがここに写してみる。

氏系本に、高主六男、冬雄之養子、元大内人とあり。

大補任に、寛平九年十二月廿二日、被<sub>三</sub>始置<sub>三</sub>大神宮司檢非違使<sub>一</sub>、豊受大神宮權禰宜春彦。ハ此人、類聚大補任に、寛平九年に司檢非違使補任と云り。此職は准大内人なる故にかく記せしならん。

(中略)

補任次第に、延喜十八年八戌寅六月廿日任、兄冬雄讓也。

同云、系本云、延喜廿一年二月三日庚午、叙外從五位下。

(中略)

皇字沙汰文、延長元年十二月廿五日解に、豊受宮禰宜外從五位下神主春彦署名あり。

補任次第に、承平三年十一月廿日辞職、讓男晨晴。

同云、天慶七年正月九日卒とあれば、致仕之後十二年存生たり。

系本に、此人を白大夫明神是也、と記せり。是によりて後世には此人始め菅原朝臣に従ひて筑紫に有しを、後に伊勢国に歸り禰宜補任ありつると云伝へたれど、付会にて信がたし。

高主には一女六男があつて、一女「宮了」、一男「宗雄」、二男「冬雄」、三男「春海」、四男「秋並」、五男「冬綿」とつづき、最後がここに示した六男の「春彦」となる。双生児が三年つづけて誕生して六男となったのである。春彦はその末子である。しかし、この一女六男については虚実入り交じっているようで、系図の検討が必要である。一例を示すならば、元徳元年(一三二九)に成立した「元徳注進度会系図」によれば、高主の子として名前があらるのは冬雄・春海・秋並・春彦の四人だけである。ところが江戸後期の「考訂度会系図」(嘉永七・安政六)には、四人のほかに宗雄・冬綿の名が加わる。宗雄や冬綿について藺田守良は、「此人の事、氏系本に名のみ存せり」と記すのみである。要するに高主の子どもについては、一女六男ということも含めて、疑わしいこと、不明な点が多いといえる。大西源一氏は、『松木智彦神主伝』を著して、この兄弟について次のように記している。

飛鳥十世の高主に至り、冬雄、春海、秋並、春彦の四氏を産む、其の中秋並の裔は宮後、久志本諸家となり、春彦の後は松木家となれり。

すなわち宮了、宗雄、冬綿は数えられていないのである。彼らの存在が、そもそも明らかではない。「宗雄」や「冬綿」は、後に付け加えられたのでは、と思わせるところがある。双生児が三年続けて誕生したというのも、奇遇、稀な誕生として語られたのである。いうならば、神の子が「小さ子」の姿で誕生する「異常出生譚」にも似た神話的な発想が、この系図のうちにうかがえるのである。

藺田守良の「度会系論」が、「補任次第」や「皇字沙汰文」を引用しながら、史料にもとづいて記述するところには、虚実を判別しようとする姿勢がうかがえる。春彦を白大夫とする説が、付会といつて斥けられるのもそうであろう。「宗雄」や「冬綿」だけではない。六男春彦も、その虚実はきわめて曖昧である。外宮大内人、禰宜にして、承平三年に職を辞し、天慶七年正月卒去という経歴はたどれるにしても、その閥歴だけでは、白太夫の伝説が、彼に結びつけられた事情は明らかにはならない。そこで春彦にまつわる一女六男の伝承について検証することがつぎの課題となる。

### (三) 童女の妙見像

高主の一女六男の事跡については、「度会系論」が「宮了」の条に、『岩屋本縁』(神宮文庫蔵)の一節「岡崎宮妙見本縁」を引いて述べている。『岩屋本縁記』は、大須真福寺所蔵「高庫藏等秘抄」(永保二年八一〇八二〇二月八日書写の跋あり)の寛文二年の転写本である。傍線を施した箇所が、『岩屋本縁記』からの引用である。

岩屋本縁、岡崎宮妙見本縁云、妙見本願度会氏遠祖大神主飛鳥末孫大内人高主、貞観元年己卯十一月十五日、一子前大物忌子、入御賢河卒去、八十五才、即時從御賢河淵底而、得妙見星童形像、奉居尾御陵以西小田岡崎宮靈地利、祈氏人之繁昌、爰貞観二年十一月十五日、一胞二人男子生、宗雄・冬雄

是也、同三年十一月十八日、同胞二人子生、春海・秋並是也、同四年十一月十五日、亦同胞二人男子所生、冬綿・春彦是也云々、と有より数百年の後も此事を伝へ来て、外宮神事記、寛文年中記せる書に、△岡崎神事の条に、十一月、山宮神事詔詞に云、玉女天王御門於開給、吉日良辰於祇定天、妙見大菩薩御門人、日本朝東海道伊勢国度会郡沼木郷河原村爾住須留、掛畏支豊受皇太神宮一彌宜云々、△此処に彌宜中の連名を記せり、結縁同志△仁志天、奉仕御調二棒云々、とありて、其祭祀のさま外宮祭祀今式に記して、今の世まで山宮神事を奉仕れり。

大内人高主の女、前の大物忌子・宮了が御贄河が沈んで亡くなったので、川底を探してみると妙見星の童形像を得た。そこでこの妙見像を尾部御陵の西、小田の岡崎宮に祀って、度会二門の繁栄を祈ると、毎年十一月、双生の男子が三年ついで誕生し、六子を得た。それより数百年、氏人の繁栄を祈って山宮祭を営んできた、というのがその次第である。

御贄河とは現在の勢多川であり、そこに架かる小田橋と尾部坂との中間に岡崎宮あった。ここに妙見像が祀られて以来、妙見堂と称せられるようになったのである。大内人高主は大物忌の父として、内・外両宮の神に御饌を供えることを仕事とし、その娘宮了は、大物忌子として神のお側に仕えた童女であった。しかし、実在の女子であるのか、きわめて疑わしい。むしろ、三年つづいての双生児の誕生ということもふくめて、作られた神話と考えられる。

妙見の童女像を祀った妙見堂（旧岡崎宮）は、貞観二年中の草創にして、「尾部坂之陵」の西に宮居を占めた（『勢陽雜記』）。岡本町から御贄河に架かる小田橋を渡り、尾部坂をのぼると妙見山である。そこに妙見堂があり、度会氏の祖先祭祀は、初めここで営まれたのである。『岩屋本縁』が、「得・妙見星童形像」、奉居尾部御陵以西小田岡崎宮靈地「利」と述べる「岡崎宮」がその地である。「宮了」の靈身、妙見

菩薩は初めこの「岡崎宮」に祀られて、度会氏はそこを先祖祀りの靈地としてきた。

直ニ御贄河ノ淵底ヨリ件ノ童女星靈之像ヲ得テ先ツ尾部御陵ニ居ヘ奉ルハ東方ニ尾部御陵有ベシ。其ノ後西小田岡崎宮ヲ以テ靈地トナスハ今之ヲ妙見トイフハ習合ノ名目ナリ、実ニ星ノ精靈ニシテ、社号ニ謂ヘリ、則是岡崎宮ナリ。

この岡崎の宮（妙見堂）の靈託によって妙見星を祀り、度会氏はここに氏人の繁栄を願ったのである（『豊受皇太神宮諸祭由緒記 下』）。尾部坂から尾部御陵にいたる一帯は、かつて葬送の地であった。妙見堂はその入り口にあり、そこに妙見菩薩の童形像を祀って、双生の兄弟六人を遠祖として、度会二門の祖先祭祀・山宮祭は営まれた。さらにはここで「胞衣納め」の習俗が行われていた。度会氏の胞衣を埋めて、一門の繁栄が祈られたのである。

又妙見堂ノ後ロニ度会氏ノ氏人ノ胞衣ヲ埋藏ノ所アリ。古記ニハ見エサレトモ古ヘヨリ斯ル例トテ今尚此レヲ遣テ藏スコトナリ。按スルニ彼ノ六子ノ胞衣ヲ此ニ藏シテ故実トナリ将来レルニヤ。

#### （『神境紀談』）

後世に至るまで妙見堂の後ろに度会氏の胞衣が埋められるのも、かつてこの妙見山で度会氏の山宮祭が行われたことの名残であろう。しかし、先に述べたように貞観二年十一月から時を同じくして、双生児が三年つづいて誕生した、という『岩屋本縁』の記述は、にわかに信じがたい。「度会系論」（『神宮典略』）の著者は、「かゝる姦計は神職の徒の露云出すべきにあらず、たゞ無頼の悪僧の人を欺き、財を貪る所為」といって非難するのわからぬではない。神宮神官からすれば怪しからぬ所説かもしれぬが、しかし、妙見星を祀る神仏習合の祖先祭祀がここで営まれた意味については、別に考えねばなるまい。

(四) 外宮の山宮祭

山宮祭は内宮・外宮ともに行われていた。内宮は城田郷津不良谷を祭場としていたが、後に宇治郷北谷に移された(『神境紀談』)。外宮の場合も妙見堂から変転を経て、岩戸山の東麓、瀧谷、通称山宮が谷で、正権禰宜などが参加して営まれた。

此谷にて山宮の神事といふは毎年霜月の下旬に吉日を撰び米、大豆、麴、酒、塩、柑子、海藻、香、灯心、松、油、等種々の供物を調進して正権宜権禰宜集會して、面々竈をぬり、火を焼き酒宴して祭る事あり。是妙見星を祭ると也。山宮の神事の祝詞にも妙見星を祭りて田園五穀蚕養を祈ると有り。亦古老の伝に、古は高原ノ前山にて祭りしを、後に此所里近きに便りて祭りし也。泰山府君を祭るなり、共いふ。鼓が岳は当地の名山なれば山祭りにてもあるべし。山を祭るに、妙見星、又我氏人に恵みある由来あればあわせ祭るにや。山宮の祝詞を按ずるに、寛平二年以来の例を用ひて祭るといふ詞有り。又云ふ、当祭は於繼橋郷前山辺ニ雖令ニ勤行。撰定清浄地於滝谷。建武二年祈奉遷祭庭於当地也(『勢陽雜記』・度会郡「山宮が谷」)。

十一月に行われるというのは、高主の六兄弟の誕生日に因んでのことであろう。泰山府君を祀って、「田園五穀蚕養」の豊穰を、祖先の霊を招いて祈るのである。また「我氏人に恵みある由来あればあわせ祭る」とあるように、妙見星に度会一門の繁栄を念ずるものであった。右の『勢陽雜記』の記述でおよその概要はつかめるが、『外宮子良館祭奠式』を参考にして、その神事を説明してみよう。まず椎・萱の木で仮御殿と棚がしつらえられる。つぎに神の供え物が用意されて棚に供えられる。つづいて強飯・饗膳・盃酌があつて、神前に幣串が立てられ、祝詞が禰宜によってとなえられる。錢切・散米があつて、祭場が清められる。そして神前の供え物がかたづけられ、一同がともにい

ただく。最後に仮御殿と棚が壊されて神事は終わる。いわば神を迎えての神人共食の祀りである。仮神殿がしつらえられて、度会氏の遠祖が迎えらる。柳田国男は度会氏の山宮神事を論じて、祭の庭にしつらえられた「山宮」を、「凡俗の眼には見えない祖霊の隠れ宮」と云っている。度会氏の祖霊を招いて、五穀豊穰と氏人の繁栄が祈られたのである。

しかしその神事が妙見星、あるいは泰山府君を祀つてすめられるのはどうしたことだろう。神宮の神事のはずが、ここには陰陽道や修験道の影響が見られる。妙見星は北極星のこと。国土を擁護し、災難を消滅させ、敵を斥ける菩薩として信仰され、寺門の三井寺では「尊星王法」の秘法さえうまれた。さらに泰山府君は、地獄の冥官ともされ、竈神とも信じられた陰陽道の神である。度会氏の先祖祭が、こんなふうにして神仏習合のかたちで行われるのは、一見不思議である。なるほどこれは柳田が指摘するように、「自分の先祖の祭を、外国信仰の教理で解釈して疑わなかったことは同じであつて、まことに笑止なる時代の学問の貧しさであつた」かもしれないが、あながちそうも言い切れまい。山宮祭の神事には、修験僧の関与があつたとする『每事問』の記録を見ると、あらためて神仏習合の意味が問われなければならないまいと思う。

問、岩戸山ノ東麓ノ谷ニテ毎年十一月ニ山宮ノ神事アリ、此ハ大山木ヲ祭ルトナリ、大山木ト云フ神ノ名ナルカ、亦タ大山ノ生フル木ヲ祭ルト云ノ義カ、答、俗ニ大山府君ト云フノ府君ヲ木ト訛レルナリ、然シテ泰山府君ト云フハ本朝ノ神ニモ仏家ノ天部ノ神ニモ非ズ、道術仙家ノ祭ナリ、凡テ此ノ祭ノ由来余レ旧記暗キ故ニ其ノ事ヲ知ラズ、近比マデ法楽舎ノ住僧此ノ祭庭ニ出テ禰宜ト混ジテ神事アリタルニ、延宝三年十一月二十七日ノ神事ヨリ彼ノ僧ヲ除ヒテ出ヅル事ヲ容サザルナリ

泰山府君が「道術仙家ノ祭」と断じられるだけで、山宮神事の由来

を明らかにしない。ただ外宮の禰宜とともに法楽舎の僧が神事に列なっていたが、それも延宝三年十一月二十七日の神事からは停止されたという。ただ停止されたといっても、まったく関係が絶たれたわけではない。『神宮典略』(十五「法楽」)には「今も常寧坊より山宮祭の時、祭物また献物あるよしをいへり」とある。常寧坊とは、おそらく世義寺の塔頭かと思われる。

外宮の法楽舎は世義寺に置かれていた。この寺は伊勢市岡本町に現存するが、教王山神宮寺宝金剛院と称して、今は真言宗醍醐派に属する。修験道の道場として、護摩修行が行われ、山宮祭も当寺で焚かれる柴燈護摩の火を合図にして始められたという。その場所も変転をかさね、永禄五年、継橋郷前山から坂之世古に移転し、寛文十一年現在地に移った。法楽舎では、内外宮ともに、大神宮法楽のために千部の法華経が転読されたという。山宮祭に世義寺の修験僧がどうかかわっていたのか、その詳細を今、明らかにできない。しかし、修験僧が列座して営まれた山宮祭は、度会氏の祖先祭祀であり、豊受大神宮法楽のための祀りごとでもあった。

### (五) 妙見堂と常明寺

外宮の山宮祭に修験の徒が関わったとしても、山宮祭と妙見信仰はどのように結びついていたのか。その具体的なつながりを、伊勢神宮の史料のうちに見つけることはむずかしい。しかし、幸いなことに朝熊山金剛証寺にわずかな手がかりは残されている。伊勢の東に聳える朝熊山は、神霊の籠もる霊山として、伊勢の人々から「嶽さん」ともよばれて親しまれてきた。伊勢から眺めれば、朝日は朝熊山の後ろから昇ってくる。この霊山は「嶽参り」の対象として信仰を集め、死者供養の山として、弘法大師によって開かれたとする伝承をもつ。死者の霊魂は朝熊山に登り、その山中に鎮まると信じられてきたのである。

内宮の東北にあたり、峰つづきであるところから、「お伊勢参らば朝熊をかけよ、朝熊かけねば片参宮」とうたわれて、伊勢参宮の人々は、この山にも併せて詣でることを慣わしとした。

伊勢神宮と金剛証寺とのつながりは深く、西山克氏の論にしたがつて、今、それを二点にまとめてみる。

①内宮長官(一禰宜)が、両大神宮百日参詣と朝熊嶽千日参詣の結願者に証明書を給付してきた。

②朝熊嶽の護法神「雨宝童子」は、天照大神の化身とする団体説が、室町末期以降、強調された。

この二つは、神仏習合思想が生んだ両部神道によって、朝熊山と内宮の本迹関係が強調された結果をよく示している。西山氏のことをばかりれば、「中世末期から近世初頭にかけて、太陽の女神を祀る内宮と金星を仰ぐ修験の霊地としての朝熊山のあいだには、すでに濃密な関係が成立していた」のである。

慶長十九年、朝熊嶽の修験僧明叟によって記された『朝熊嶽縁起』(金剛証寺蔵)には、両者の神仏習合思想がみごとに反映している。

蓋し日の天照大神の元神は、観世音菩薩也、星の天孫大神の元神は、虚空蔵菩薩也、月の豊受大神の元神は、大勢至菩薩也、是の故に、観世音菩薩は、五十の宮の東北の隅に当り、天朗の峰に鎮在し玉ふ也、虚空蔵菩薩は、宇治宮の東北の隅に当り、朝熊嶽に鎮在し玉ふ也、大勢至菩薩同体一理の妙見菩薩は、豊受の宮の東北隅に当り、高日の山に鎮在し玉ふ也

天照大神を祀る五十の宮(伊雑宮)は観世音菩薩、それを「日」になぞらえ、天孫大神を祀る宇治の宮は虚空蔵菩薩、それを「星」になぞらえる。そして豊受大神を祀る豊受宮は、大勢至菩薩と同体の妙見菩薩、それが「月」になぞらえられる。それぞれの神仏がこうして配されて、日(天照大神)、星(天孫大神)、月(豊受大神)に当てられる。この神仏習合の神仏の配置は、「天照皇太神宮神詠」(朝熊嶽略

## 度会春彦本縁

縁起」・寛延三年）にも反映している。

日と月と星と列間の池の水たへぬかぎりとおまつひつぎよ

日と星と月の三者が、朝熊嶽の列間の池で遊戯するさまをうたう。

この天照大神の神詠にしたがって、神仏は配され、それらが「天つ日継」、皇孫を庇護し給うというのである。

ここで注目されるのは、「大勢至菩薩同体一理の妙見菩薩は、豊受の宮の東北隅に当り、高日の山に鎮在し玉ふ也」の一条である。豊受宮（外宮）の東北隅、すなわち表鬼門にあたる「高日山」に鎮座されるのは「妙見菩薩」である。外宮の東北、高日山とは、高日の岡にある高日山常明寺である。当寺は廃仏毀釈のときに廃寺となつて今はないが、寛永年間に天台宗に改められるまでは真言宗であつた。「両太神宮内院」と称されて、仏寺でありながら鳥居を構えていた。この常明寺は、「度会三門の氏神」を祀り（『勢陽雜記』）、また妙見堂を管理していたのである。

このことを念頭に置いて、『岩屋本縁』を読めば、度会氏は外宮の丑寅、表鬼門の神聖なる地、妙見堂に妙見菩薩を奉じて、豊受大神の守護者たらんことを祈つて、山宮祭をつづけてきたということになる。外部からの穢れは、妙見星の威力によって祓いやられたのである。「山宮の神事の祝詞にも妙見星を祭りて田園五穀蚕養を祈ると有り」という『勢陽雜記』の説明も、そう理解すればわかりやすくなるだろう。豊受大神こそ五穀豊穡の守護者であつた。

## （六）度会氏の祖先神話

外宮の山宮祭について記録する「豊受皇太神宮諸祭由緒記 下」によれば、春彦は一族を率いて山宮祭を主催し、氏人の繁栄を祈つたという。

凡ソ仁和四年十一月十八日、神主春彦岡崎ノ宮ノ靈託ニ任セ、氏

人等ヲ率キ清浄ノ山谷ニ向ヒ、日月諸星廿八宿五星ヲ祭り奉リ、今山宮ノ祭ト号スル是ナリ、凡ソ神主等ノ妻子専ラ岡崎ノ宮ノ星靈ヲ祈ルベキナリ

この一節も『岩屋本縁』に記されるところである。さらには度会の神主は、春彦に倣つて一家眷属あげて星祭すべきであるというのである。ここで注目すべきは、山宮祭を説明して、高主や春彦について記述する『藤園雜纂』（神宮文庫蔵）の一節である。

妙見堂ノコト石屋本縁ニ載スル故事覺束ナキコトナリ。但シ高主モ春彦モ陰陽道信仰ノ人ナリ。尤モ妙見星ヲ祭ルコト、此頃一般ノ風儀ニテ、山宮祭ト云フモ太山府君ヲ祭ルナリ。山宮祭ト云コトハ山君祭ト称ヘタル山君ヲ山宮トナセルニテ、山君スナハチ太山府君ノ略称ニテ北辰星ノコトナリ。

高主と春彦の二人が「陰陽道信仰の人」であるという。伊勢神道の教義からすれば、たとえこれが排斥すべき暴論であつたとしても、延宝三年以前、山宮祭には修験僧も列なつて行われていたことを思えば、「妙見信仰」と結びつくのも不思議ではない。あるいは「太山府君」を祀るとすれば、陰陽道との習合も考えられる。ならば春彦を「陰陽道信仰の人」とする説は、おそらく山宮祭の由来、性格ともかかわっていると思われる。

妙見の童女像が祀られた妙見堂を管理したのが常明寺である。当寺が度会三門の氏寺であつたことを思えば（『勢陽雜記』「常明寺」、祖先祭の山宮神事に、どういう形であれ、常明寺がかかわっていたと思われる。それを示唆するのが、妙見菩薩は高日の山に鎮座し給うと記した先の『朝熊嶽縁起』の一条である。

その常明寺では、雄略二十二年、外宮にて大神宮法楽の神樂が奉じられて以来、毎年十一月十六日に霜月神樂が行われてきた。「元和元年十一月」の奥書がある『常明寺縁起』にはつぎのように記載されている。

雄略二十二年、外宮御幸臨已來太神宮法樂神樂、此山<sup>ニシテ</sup>毎年十一月十六日後夜<sup>ノ</sup>物詣此寺、百余人神樂男巫八乙女翻羅綾袂<sup>ニ</sup>。内宮八十末社、外宮四十末社深秘歌<sup>ヲ</sup>唱哩哩有樂詞拍子也。誠是天巖戸前八百萬神達集給、太神宮法樂砌面白<sup>ク</sup>日于<sup>レ</sup>今不<sup>レ</sup>絶事難<sup>シ</sup>有云々折しも外宮の山宮祭と時を同じくする十一月十六日である。おそらくこれは山宮祭のあと、場所を常明寺に移して行われた霜月神樂と思われる。『岩屋本縁』によれば、春彦<sup>ハルヒコ</sup>六人の兄弟は十一月(十五・十八日)に生まれたという。つまり彼らは霜月祭のときに誕生したのである。ことに冬至は昼と夜の長さがあい半ばして、太陽の力が、一年中でもっとも弱まると信じられた。まさにその時期に、死と再生、新たな生命の生まれ清まりを信じて、霜月祭は営まれ、神樂は奉納される。それは伊勢大神に仕えた「宮了」なる童女の死と三組の双生児の誕生という祭祀のうちに語られてきた神話であろう。

山本ひろ子氏によれば、常明寺境内の神萱落社は、「八王子信仰の根拠地」であった。ここで霜月十六日後夜に行われる神樂は、「百余人の神樂男、巫、八乙女の羅綾の袂を翻す」盛大なものであった。この座に列なる「巫」については、『神宮典略』(「八王子社祝」)が説明している。

此社は神宮に拘はらず、村人の沙汰なれば、社祝の代りに巫をもて仕へしめしならん。二門氏社には博士の祝詞を申すよしを記したり。かく巫といひ博士といふのは男巫にて、今の世にいはいゆる陰陽師の事なり。へ今も此社は其村の陰陽師此社の祭を預かれりと云。V委しく知りがたし。

「此社」とは、宇治(内宮)中村の八王子社のことであるが、外宮の場合、八王子信仰のメッカといえ、常明寺の神萱落社のことである。「巫」とは、「男巫」であり、博士ともいった。陰陽師である彼らは、山宮祭の夜、祝詞をあげて大神宮法樂の神樂を奉納する。度会二門の氏寺でおこなわれるこの霜月神樂は、山宮祭と軌を一にして、氏

人の繁栄と五穀の豊穰を、伊勢大神に祈願するものであろう。

伊勢神樂に「五方の遊び」と題された一曲がある(『天文本神樂歌』)。

いや東に日りう日を出し いや西には夕月夜を照らし

いや北には妙見大將軍の殿造り 南には仏の御国とかや

「日りう」とは日輪のこと。東に太陽、西には月、北には妙見星、

南には仏さえおわして、この伊勢大神宮を擁護してくださる、という

ありがたい祝言の歌なのであろう。ここにうたわれる「妙見大將軍」

は、外宮の丑寅(北東)にあつて、伊勢大神を守護する菩薩である。

先にも述べたようにこの妙見堂を管理していたのが、常明寺である。

ここで霜月神樂は演じられ、「妙見大將軍」の一曲が歌われる。

春彦をはじめとする六人の兄弟は、まさにこの霜月祭のときに誕生する。それは新しい生命力の更新を期待して、度会氏の祖先神話として語られたものであろう。双生の男子の、三年つづきの誕生とは、豊かな稔りのシンボルとして創られた神話である。大物忌子「宮了」は、豊穰を祈るために神に捧げられる御贄として、創られた女子であらう。その意味では、彼女は伊勢大神に仕える巫女「大物忌の女」でなければならなかった。こうして春彦を祖と仰ぐ死と再生の神話は、山宮祭と時を同じくして演じられた霜月祭のうちに語り伝えられたのである。霜月の神事のうちに高主や春彦ら、遠祖の神靈は呼び出され、「子孫繁昌家門富貴一家一族從類眷屬息災安穩福寿増長」(『山宮祭祭文』神宮文庫蔵)が、巫によって祈願されたからこそ、高主や春彦は「陰陽道信仰の人」と称されたのであろう。

#### (七) 神萱落社の八王子祭文

山宮祭は常明寺でも行われた。『山宮祭儀式』(神宮文庫蔵)によれば、「山中積雪甚深之間於常明寺可被遂行也」と記されるように、山の雪が深いときには、当寺が祭事の間となつたし、山宮祭のあと、場

所を移して神楽が奉納されたのが常明寺であった、と先に述べた。このとき読み上げられるのが『山宮祭祭文』（神宮文庫蔵・天保十二年六月度会履正写）である。

敬白御明千五百燈太餅廿五枚右奉供所者掛忝内外二宮并十一所別宮熊野三所権現伊良古三所太明神北計七星本命元辰并新年八卦神等当村二天八王子或内或外諸神惣者天象地類悉以奉法楽莊嚴者也乃悲ハ父母兄弟子有甘ト書ノ子孫繁昌家門富貴一家一族從類眷属息災安穩福壽増長令如意満足給謹啓日如件（以下略）

伊勢十一所の別宮初め諸神が勧請され、度会氏の「家門繁栄」が祈念され、神楽が奉納されるのである。祭文にいう「八王子」とは、常明寺の境内社・神萱落社のことをいう。先にも述べたように、この神萱落社は外宮の「八王子信仰の根拠地」であった。十二月十日には当社で「茅萱祭」が行われ、「八王子祭文」が読み上げられる。『常明寺神事作法』（神宮文庫蔵）に記録されている一条を引く。

一、先内陣ニテ般若法則読テ大般若ヲ番之禰宜御被成候間、：：庭ニ出テ茅之輪之前ニテ八王子ノ祭文有リ。番之御禰宜ハ十人之御神主様之内二人ツツ廻番ニテ御参御成候

内陣神前にて大般若転読のあと、庭の茅の輪の前で禰宜によって、「八王子祭文」が唱えられる。ここにいう「八王子祭文」とは、『牛頭天王縁起』のこと。神宮文庫蔵『八王子祭文』には、

蘇民将来申テ云末代ノ衆生何蘇民将来カ子孫トシラシメ奉ラント申。神王宣ク茅輪ヲ作テ右ノ腰ニ着ケシメヨ。註（しるし）トシテ守護セシメント宣フ。

とあって、茅の輪で守られる蘇民将来の子孫のことが述べられている。祭文は常明寺の別当職・常楽坊の役（常明寺別当職年中行事式）神宮文庫蔵）であった。この祭文が終わると、社頭に飾ってあった茅萱を、常明寺の住持が加持をして度会氏の氏人に配ったのである（常明寺別当職年中行事式）。

このような祭の次第を見てくると、神萱落社の「茅萱祭」は、疫神祭であることがわかる。常明寺のある間の山は、内宮と外宮の境の地であり、古代よりこの地で「道饗祭」が行われていたことを思えば、『茅萱祭』は疫神退散を念ずる神事なのである。十一月五日の夜、常明寺で牛王加持が行われ、妙見堂の牛王札が度会二門の氏人に配られるのも、家門繁栄を祈念するためのものであろう。

常明寺と神萱落社は、ともに度会二門の氏寺であり、氏神であった。そこで十一月十六日に営まれる山宮祭は、遠祖春彦を神として祀り、度会氏の繁栄を祈る祖先祭祀であった。時を同じくして行われる霜月祭もまた、度会氏の繁栄を祈念するものであった。その祭事のうちに生まれたのが、妙見星を祀った春彦の神話である。このように見てくると、双生の男子の、三年つづけての誕生を語る豊穰の神話が、度会二門のうちに生まれた子細は、常明寺を抜きにしては考えられないといえる。度会氏の氏寺たる常明寺は、神ごとのいとなまれる神聖なる場所として、蔽えの神事を執り行ってきたのである。

（注）

（1）拙稿「伊勢の白大夫伝説―御師と伊勢比丘尼―」（『東海近世』第十七号）

（2）大西源一『松本智彦神主伝』伊勢市立図書館蔵（一九一九年）

（3）『大神宮叢書』所収 神宮司庁（一九七六年）。『豊受皇太神宮諸祭由緒記 下』は、まず「尾部御陵」に祀ったとするが、そのことも伝承であって、詳細は未詳である。

（4）『宇治山田市史』（上巻「尾部御陵」「尾部坂」の項）宇治山田市役所（一九二九年）御巫清直『尾部御陵紀原』（『増補大神宮叢書』8）所収 神宮司庁（二〇〇七年）

（5）前掲書（3）

（6）柳田国男『山宮考』（全集十四巻）中公文庫（一九九〇年）

- (7) 岩本裕『日本仏教語辞典』(「妙見」「尊生王の法」「尊生王の御修法律」の項) 平凡社(一九八八年)
- (8) 前掲(6) 柳田論文
- (9) 『宇治山田市史』(下巻「世義寺」の項)
- (10) 久保田展弘『日本の聖地―日本宗教とは何か―』講談社学術文庫(二〇〇四年)
- (11) (12) 西山克「金胎両部世界の旅人」(『聖地の想像力―参詣曼荼羅を読む―』所収) 法蔵館(一九九八年)
- (13) 『朝熊山金剛證寺典籍古文書』所収。金剛證寺(一九九四年)
- (14) 久保田収「天照大神と雨宝童子―朝熊山の信仰を中心に―」(民衆宗教史叢書第一巻『伊勢信仰Ⅰ』所収) 雄山閣出版(一九八五年)
- (15) 前掲書(3)
- (16) 本田安次著作集第七巻『日本の伝統芸能』(伊勢神楽之研究) 錦正社(一九九五年)
- (17) 常明寺の茅葺祭の八王子祭文と伊勢神楽については山本ひろ子氏「牛頭天王島渡り」祭文の世界」(『異神―中世日本の秘境的世界―』平凡社・一九九八年)に詳細な考察がある。
- (18) 前掲書(16)
- (19) 『尾部長紀原』に以下のように記されている。「間ノ山トイフハ、継橋郷(※山田)ト宇治郷トノ限堺ノ山ニシテ、上古堺ノ道饗祭ヲ行ヘル山ナルヲ以テ饗ノ山ト称スルナリ。」